

2022年5月29日 佐土原キリスト教会 礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書7章24～30節

説教題：主イエスを負かした信仰

3年前にお出で下さった佐藤彰先生の本の中に、次のような話があります。ある時、先生の、3歳になるご長女の靴が一足見当たらなくなりました。あるはずの所にありません。捜しても、捜してもありません。結局、その靴のことはいつしか諦めてしまわれました。そんなある日、先生が、自動車を運転しながら、ふと後ろの座席を振り返ってみると、1歳のご次女が、なくなっただけの靴をおもちゃにして遊んでおられたのです。「あった！でも、どこに？」。やがて一切のことが分かりました。靴ははじめから、自動車の前部座席の下にあったのです。「ない、ない」と目の色を変えて捜し回っておられた時から、前部座席の下にあったのです。しかし、それが、体が大きく、視点も高い大人の目には入らず、1歳のご次女の目には、自然と飛び込んできたのです。そして、靴に興味を持ったご次女は、当たり前のようにして、手に取って遊んでおられたのです。先生は、この出来事のレッスンを次のように書いておられます。「私たち目の位置の高い大人には見えなくて、その位置の低い1歳になったばかりの女の子には見えた——という事実が残りました。高いがゆえに見えなくて、低いがゆえに見える。何やら大切なことを教えられた気がして、自らの低くあることの幸い、自らを低くすることの尊さを、今一度胸に刻んだ次第です」。

{因みに佐藤先生ご夫妻は、原発事故で避難せざるを得なかった元々の地域—(そこが帰還可能区域になるそうです)—にある教会に戻り、そこで働きを再開されると伺いました。祝福をお祈りしたいと思います}。

「自らを低くする」、特に神様に対して身を低くする、このことは信仰においても大切なことではないでしょうか。今朝の個所も、そのようなことを教えてくれる個所です。今朝は「スロ・フェニキヤの女が教える信仰の姿勢」というテーマで、信仰の学びをしましょう。

24節に「イエスは…ツロの地方へ行かれた。家に入られたとき、だれにも知られたくないと思われたが、隠れていることはできなかった」(24)とあります。イエス様はここでガリラヤを出てフェニキヤのツロに行っておられます。ツロはガリラヤ文化圏でしたが、行政的には、国境を越えてシリア州のフェニキヤに位置します。異邦人の地です。(ちなみに「スロ・フェニキヤ」というのは「シリアのフェニキヤ」という意味です。北アフリカにもフェニキヤという町があったので、区別するために「シリアのフェニキヤ/スロ・フェニキヤ」と言いました)。なぜツロに行かれたのか。伝道と論争の激しい生活からしばらく身を隠して、休もうとされたのかも知れません。論争相手のパリサイ人や律法学者達は、「汚れる」と言って、異邦人の地域には来ようとしなかったでしょうから。

しかし、身を隠そうとされたイエス様を引っ張り出すような人物が現れるのです。スロ・フェニキヤの女—(ギリシャ人、異邦人の女)—です。彼女には「汚れた霊につかわれている」としか表現できないような病気で苦しんでいる「小さい娘」がいたのです。3章に「ヨルダンの川向こうやツロ、シドンあたりから、大ぜいの人々が、イエスの行なっておられることを聞いて、みもとにやって来た」(3:8)とあります。イエス様のことは、すでにツロの地域にも知られていました。彼女もイエス様の噂を聞いていたでしょう。「そのイエス様がツロに来られた」と言う話を聞いて、急いでやって来て、イエス様の足元にひれ伏して娘の癒しを願ったのです。

ところが意外にも、イエス様は彼女の願いを拒否されます。「するとイエスは言われた。『まず子どもたちに満腹させなければなりません。子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやる

のはよくないことです』(27)。慈愛に溢れたイエス様の言葉とは思えない言葉です。「子どもたち」はユダヤ人、「子犬」はユダヤの神を信じない異邦人のことです。イエス様は、何を考えてこのように言われたのでしょうか。

1つには「まず子どもたちに十分食べさせなければならない」とあるように、この時期「イエス様は、その伝道のターゲットをユダヤ人に絞っておられた」ということがあります。弟子達を伝道に送り出す時も「邦人の道に行ってはならない…サマリア人の町に入ってはならない…イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい」(マタイ 10:5~6)と言っておられます。また「ユダヤ人から始める」と言うは、神様の計画でもありました。創世記 22 章 18 節で神様はユダヤ人の父アブラハムに向かって「地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る。あなたがわたしの声に聞き従ったからである」(創世記 22:18)と言っておられます。そして実際に、イエス様によって訓練されたユダヤ人の弟子達によって、キリスト教(福音)は、異邦人へ(全世界へ)広がって行くのです。

しかし、そのような事情があったとしても、「小犬に投げてやる」という言葉は激しく聞こえる言葉です。「小犬」と訳されている言葉は、日本語に直すと「我が家のワンちゃん」というような温かいニュアンスの言葉だそうですが、それでも「犬」ですから、言われた人間が嬉しいはずがありません。屈辱を感じる言葉です。確かに当時のユダヤ人は、異邦人のことを「犬」と呼んでいました。そういう文化の中で起こっていることです。それも全く関係のないことではないかも知れませんが、もちろんイエス様は、そういう意図で言われたのではないでしょう。宗教改革者ルターは「主イエスのこの言葉によって、女の心も肉体も粉々に砕けた」と解説したそうです。その通りでしょう。

しかし、ここがポイントですが…。イエス様に何かを願うことは誰でもしました。しかし、一生懸命願ったのに断わられた、大事なのは「そこでどうするか」です。言葉を換えれば「神様を信じて生きている。それにも拘らず嬉しくないことがやって来る。『どうして私にこんなことが起こるのですか』と神様に言いたくなる。しかも、神様からの助けがないように感じる。その時どうするか」ということです。私達だったらどう反応するのでしょうか。「そこまで言われて頼む必要はない」と掌を返すように態度を変えるのでしょうか。「神様を信じていたって、ダメなものはダメなのだ、結局何もならないんだ」、あるいは「神なんかおられないのだろう、おられたとしても、私のことなんか構ってくれる神ではないのだ、もう良い」、そう開き直るのでしょうか。でも、彼女はそうしなかったのです。イエス様が拒否された、その言葉に対して言うのです。「主よ。そのとおりです。でも、食卓の下の小犬でも、子ども達のパンくずをいただきます」(28)。当時の人々は手を使って食事をしました。食事中に汚れる手は何で拭いたのでしょうか。ナプキンはありません。パンで拭いたのです。そしてその汚れたパン屑はテーブルの下に落としました。子供達は、自分の落とすパン屑を小犬が食べようとするのを見て「あっちへ行け」とは言わないでしょう。「もっと食べさせてやろう」と喜んで落としたのではないのでしょうか。彼女は、その場面をイメージしてイエス様に返事をしました。「主よ…でも、食卓の下の小犬でも、子どもたちのパンくずをいただきます」(28)。言い換えれば、「イエス様、それでもイエス様から溢れる恵みは、私達にまで及んで来るに違いありません。私はイエス様の恵みに与れます。あなたはそれほど恵み深い方です」とそう言っているのです。『小犬』という言葉は『ワンちゃん』というようなニュアンスの言葉だと申しあげました。ある聖書学者はこの言葉からこう解説しています。「イエスはこの言葉を、柔らかな態度で(微笑みながら)話されただろう。それを見て取って彼女は、機会がどちらにでも動くのを知った」(W バークレー)。

イエス様は、見下げるように、馬鹿にするように、この言葉を言われたのではないのだと思います。そのイエス様の雰囲気も助けになったと思いますが、彼女はイエス様の「拒否」の返事の中に—(祈りが聞かれないような状況の中に)—それでもそこに隠されている「神の恵み」を信じて、その恵みを探そうとしました。恵みを探そうとしたから食い下がったのです。いや「食い下がった」と言うより、イエス様は「拒否」の言葉を語っておられるのに、彼女は「いや、あなたの恵みは私に及びます、及ばないはずがありません」と、あたかもイエス様が「分かりました」と返事をされたかのように答えたのです。カナダの教会で中野雄一郎という先生を伝道集会にお招きしたことがあります。メッセージの中で先生は「領収書の祈り」という話をされました。「クリスチャンは『ああして下さい、こうして下さい』と『請求書の祈り』ばかりしている。そうではなくて『〇〇して下さいを信じます。ありがとうございます』と『領収書の祈り』をなささい」ということでした。先生の言葉を借りれば、彼女は「領収書の祈り」をしたのです。イエス様の意図はここにあったと思います。彼女からこの信仰を引き出そうとされたのではないのでしょうか。これこそ神の恵みを豊かに受け取って行く信仰です。そして彼女は見事に、イエス様の「拒否」の言葉の中に、「大丈夫だよ」という響きを感じ取り、恵みを信じて食い下がったのです。

イエス様は言われます。「そうまで言うのですか—(『その言葉で、じゅうぶんである』口語訳)。それなら家にお帰りなさい。悪霊はあなたの娘から出て行きました」(29)。イエスが癒しを為さる時、例えばヤイロの娘を癒す時には、「少女よ…起きなさい」(マルコ 5:41)と、ご自分の言葉をかけて癒されました。しかしここでは、聞きようによっては、彼女が「食卓の下の小犬でも子供達のパン屑をいただきます—(異邦人の私にもイエス様の恵みは及ぶはずです)」と言ったその言葉を、イエス様はご自分の言葉のようにして用いて、その言葉のままに御業を為さったかのようなのです。この物語は、聖書の中で唯一、イエス様が論争に負けた物語です。いや負けて下さった物語です。そしてイエス様を負かしたのは、異邦の女の「領収書の祈り」だったのです。その信仰をイエス様は、「マタイ」の並行箇所では「あなたの信仰はりっぱです」(マタイ 15:28)とっておられます。

しかしここで大切なことは、なぜ彼女は、イエス様の言葉の中に「大丈夫だよ」という響きを感じ取ることが出来たのかということなのです。私達は、普段どのような姿勢で神様に向かっているのでしょうか。私は、今までも切羽詰まったような時、神様を脅すことがありましたが、昨年、鬱だった時が、一番不信仰になった時だったように思います。「神様、なぜこの状態を放っておかれるのですか」、「あなたはおられるのですか」と祈っているうちはまだ良かったのですが、最も状態が悪い時には「神なんかいないんだ」といじけてみせる、そこまで行ったのです。皆さんは、いかがでしょうか。私のような酷い不信仰ではなくても、神を脅すような信仰を生きてしまうことはないのでしょうか。

しかし、彼女はそうではなかったのです。彼女はイエス様の所に来て、足元にひれ伏しました。ひれ伏してうづくまるようにしてイエス様に頼み、イエス様の厳しい言葉を聞いたのです。彼女がイエス様の「拒否」とも取れる言葉の中に、それでも「恵み」の響きを感じ取ることが出来たのは、ひれ伏していたからではないのでしょうか。身を低くして、謙遜にすがっていたからではないのでしょうか。初めにご紹介したように、私達の日常生活にも、身を低くしなければ見つからない探し物があります。神の恵みも同じではないのでしょうか。彼女は、本当に身を低くしました。脅すような信仰ではなかったのです。「主よ」と呼びかけ、恵み深い主を信じて、主の恵みにすがったのです。身を低くしたからこそ、イエス様の中に溢れている恵みを感じ取り、その恵みに

信頼して食い下がる事が出来たのです。私は、自分の信仰の姿勢を問われます。私達は、神様を、イエス様を「主よ」と呼びながら、どれ程、「私の主」である方に信頼を置いているのか、どれ程、その方の前に真の謙遜を持ち得ているのか、本当に謙遜になって仰ぎ見て、恵みを求めているか、そんなことを問われます。

ただ、私達の心は、どこかでこう言うかもしれません。「彼女は娘が治ったから良いけど、信じて祈ってもその通りにならないことがあるじゃないか。恵みを見出せないことがあるじゃないか。その時はどうするのか。それはどう考えれば良いのか」。カナダでお世話になったクリスチャンの姉妹から—(彼女は病院で看護師をしておられたのですが)—こんな話を聞いたことがあります。彼女は、ある病気の方々ばかりをお世話をしておられました。その病気の方々の状況は、実際大変だそうです。だから多くの方が、自分の運命を呪うような言葉を口にされるそうです。

「なぜ自分だけこんな目に遭うのだろうか。他の人達はこんな苦しみも知らずに元気に暮らしているのに」。ところがアフリカから移住して来た 1 人のクリスチャンが、こう言ったそうです。

「母国にいたとしたら、とてもこんな治療は受けられなかった。こうやって必要な治療を受けられることを神様に感謝している」。彼女は私に言いました。「信仰に生かされている人とそうでない人では、同じように治療を受けていても、その生きる姿勢がはっきり違うように見える。そして、その姿勢の違いが、その人の人生を良くも悪くもして行くように見える。私はその人達を見ていて、信仰者が神様から受けている恵みの大きさを確認させられている」。確かに信じて祈っても、祈ったようにならないことがあるでしょう。しかし、そこに恵みはないのでしょうか。スロ・フェニキヤの女は、ここで我を失っていません、取り乱していません、しっかりと落ち着いた着きを持っています。ある聖書学者は「それは神が彼女を支えているからだ」と言います。娘が癒されたことはもちろんですが、その前に、彼女を支えている神の働き、それこそ彼女が受けている大きな恵みではないかと、私は思います。神の恵みは、様々な形で与えられるのです。「治療を受けることが出来ることを感謝します」と言った人のように、私達が身を低くする時、神の恵みが見えて来るのです。そしてその恵みを見る事が出来る時、私達はその恵みに信頼して、神を信じて、前向きに生きて行くことが出来るのではないのでしょうか。

神様の恵み深さにどこまでも信頼して、身を低くして、謙遜に主を見上げて、人知を超えた主の深い恵みに生かされる信仰の生涯を歩ませて頂きましょう。